

社会科・地歴公民科部会 記録

助言者 広島大学大学院教育学研究科教授 池野範男

I 基調提案

教科主題 社会科・地歴公民科におけるアクティブ・ラーニング

社会科・地歴公民科では、生徒の班活動や発表などの外形的なアクティブ・ラーニングに留まるのではなく、生徒の学びの質を深める、主体的な活動を保障できる授業実践を試みる。そのために、これまでの歴史や地理に対する生徒の見方や考え方を変革させ、社会に対する見方や考え方が深まるように授業を組織する。

中学校社会科歴史的分野では、歴史を事実や知識として考えるのではなく、語るることができるものへ変革する。歴史を語るができる資質は、社会に対する姿勢や行為を創り出す資質であると考えられる。なぜなら、私達が生活している社会の基本は、共通の言語によって形成されている共同体である。それ故に、共同体の言語や、言語の使用法に結びつく価値観は、それ自体、社会的なものであり、共有されている。「摂関政治」や「藤原道長」のような歴史用語や歴史概念も、誰かが語る言葉であり、他者の価値観が結びつく。例えば、「藤原道長」には、摂関政治で繁栄した象徴的な人物であり、平安時代の政治を理解する上で重要であるとする価値観が結びつく。「藤原道長」の権力者のイメージが通用し共有される私達の国家や社会は、共通言語で構成された一つの共同体であるといえる。そのため、私達は言葉を使用する際に、共同体が尊重する価値観を結びつけるように教育され、他者の言葉の使用法を転用し使用しても違和感を覚えることはない。このような論理に基づくと、歴史教育では、歴史を語る資質が基本として必要であるだけでなく、他者の言葉の使用法を自覚・反省し、言葉を選択判断し、自ら歴史を語る事が重要となるだろう。そこで、平安時代の貴族の体験を通して、生徒が教科書に示された藤原道長の語りを反省し、主体的に自らの言葉で語るように、生徒と生徒、あるいは生徒と教師が協力する活動を組織する。

高校地理歴史科「地理A」においては、これまで知識・技能の習得や活用を軸に、地理的な見方・考え方を培う授業が展開されてきた。次期学習指導要領においては、これまでの授業の形に加えて、習得した知識や考え方を活用した、見方・考え方を働かせて、学習対象と深くかわり、問題を発見・解決したり、自己の考え方を形成したりすることによって、生徒が主体的に深く学ぶことができる授業を行っていくことになる。その中で、「地理A」の気候分野において、ケッペンの気候区分を取り上げる。ケッペンの気候区分は、植生に着目した気候区分で、気候分野においては「地理A」並びに「地理B」の教科書、中学校社会科地理的分野でも掲載されている。今回の研究大会においては、現在学習しているケッペンの気候区分の知識を生かしつつ、別の角度を用いて、地域の気候への理解を深める授業を行う。そこで、沖縄県を事例に取り上げる。ケッペンの気候区分で登場する熱帯や温帯の「年間を通じて湿潤」もしくは「降水量が多い」という指標に、同地域は必ずしも当てはまらない。今回の授業においては、様々な知識に基づいて沖縄の気候をどのように記述するかという活動を通して、気候へのさらなる理解を深める学習を提案する。

研究協議では、これからの社会科・地歴公民科に求められる授業のあり方としてのアクティブ・ラーニングの位置づけに関して、様々な観点から議論をいただくことによって、今後の学習指導への示唆をいただけることを期待する。